

第18回新潟脳神経外科懇話会

日時 平成2年6月23日～24日
会場 新潟大学医学部 第四講義室

シンポジウム —転移性脳腫瘍—

- 1) 化学療法 (CDDP/VP-16 併用療法) が有効であった転移性 yolk sac tumor の 1例

中川 忠・青木 広市 (厚生連中央総合
倉島 昭彦 (病院脳外科)
永松幹一郎 (同 産婦人科)

今回、我々は卵巣原発の yolk sac tumor が原発巣治療後肺転移を生じ、5ヶ月後に脳転移をみた症例に対して CDDP/VP-16 併用療法を行い、2クール終了時点で脳転移巣の著しい縮小効果みため若干の文献的考察を加えて報告した。症例は、51才女性、89年7月卵巣腫瘍で入院。腫瘍全摘、リンパ節郭清を行い、腫瘍組織は yolk sac tumor であった。術後、PVP 療法 (CDDP, VBL, Pepleo.) 施行。90年1月肺転移を生じ、外科的切除。3月下旬、胸膜転移及び脳転移を認め入院。CD-DP/VP-16 併用療法を開始。2クール終了後、CT 及び MRI 上著明な転移巣の縮小を示した。治療途中で、今後嚴重な経過観察を要すと考えられた。

本症例より転移性 yolk sac tumor で他臓器転移を伴ったもの、多発性転移をみたもの、単発でも直達手術が行いにくい部位に転移をみたものに対して、初期治療として効果が期待できるものと思われた。

- 2) Metastatic leptomeningeal carcinomatosis の頭痛に対する V-P shunt

川上 敬三・加藤 俊一 (秋田赤十字病院)
福多 真史 (脳神経外科)

私共は昭和43年から平成元年までの22年間に、16例の転移性脳腫瘍に対して20回の手術を行った。その内容は、全剔出10回、亜全剔または部分剔出2回、V-P Shunt 8回である。

転移性脳腫瘍に対する治療の目的は、1. 生存期間の延長、2. 症状の軽減、の二つである。私共は metastatic leptomeningeal carcinomatosis (MLC) の5例に対し頭痛の軽減を目的として V-P Shunt を行い、全例に頭痛の消失を見た。

5例の原発巣は胃癌で、non-curative の手術が行わ

れた進行癌である。主症状は激しい頭痛と嘔吐で、その他に精神症状、脳神経麻痺、うつ血乳頭、項部強直があった。髄液については、圧は全例において高く最高 500mm 水柱、細胞数はやや増加または正常、蛋白もやや増加または正常、細胞診では Class III または IV であった。

これらの症例の経過は、頭痛の発現から V-P Shunt までが 6～16週、V-P Shunt から死亡までが 1～22週と短期間であった。

術後は全例において頭痛は消失した。このうち1例は術後黄疸が生じ全身状態の悪化で1週間後に死亡した。他の4例は一時的にせよ、ほぼ正常の状態となり苦痛から解放された。

5例については、頭痛の発現から死亡までの経過が共通しており、三期に分けられる。すなわち、第一期は激しい頭痛、悪心、食欲不振、第二期は V-P Shunt 後のほぼ正常に近い状態、第三期は精神症状、意識障害、脳神経麻痺と共に全身衰弱が進行し死亡するまでの期間である。従って、第一期の早い時期に V-P Shunt を行えば第二期の延長が計られると思われる。私共の症例については、第二期を少なくとも1～3ヶ月間延長出来たのではないと思われる。その意味で、MLC を早期に診断し、直ちに V-P Shunt を行うことが苦痛の軽減に有用と考えられる。

- 3) 当院における転移性脳腫瘍治療の現況

山中 龍也・渡辺 達雄 (竹田綜合病院)
中里 慎二・小股 整 (脳神経外科)

当院の転移性脳腫瘍 120 例の治療成績について報告する。

- 1) 平均生存期間は脳転移発症後 4.5 ヶ月であった。
 - 2) 年齢、治療方法と生存期間の関係は有意差はなかった。
 - 3) 肺癌診断時の癌の進行度と脳転移発症後の生存期間の関係は有意差はなかった。脳転移巣診断時における肺癌の残存または癌の骨転移の有無による分析では、肺癌残存無し群に生存期間の延長を認めた。骨転移の有無による分析では有意差がなかった。
 - 4) 放射線治療の奏効率は 75.6 % であった。
 - 5) 脳腫瘍が原因で死亡した例は 14 % であった。肺癌では 66.6 % で原発巣が原因で死亡した。
 - 6) 全摘出例では局所再発例がなかった。放射線＋化学療法群は放射線単独群と比し再発率が低くはなかった。
- 転移性脳腫瘍は現段階では治療の困難な疾患である。治療目標は Quality of life の向上、脳転移死を防ぐこ

とにある。原発巣のコントロールが困難で短期生存しか見込めない例では保存的治療の対象、脳転移巣がコントロールされればある程度の期間、生存が期待される場合には積極的に全摘出をめざしたいと考えている。

4) 外科的治療を行った孤立性転移性脳腫瘍の検討

外山 孚・原 直行 (長岡赤十字病院)
小田 温・玉谷 真一 (脳神経外科)

昭和55年1月～平成1年12月の10年間に当科で外科的処置を受けた single brain metastasis 40例について検討した。shunt 手術や decompression のみの手術は除いた。

Primary lesion は肺癌が25人 (62.5%) と最も多く病理像は腺癌と扁平上皮癌で2/3を占めていた。転移性脳腫瘍手術後の平均寿命は6.2ヶ月。死因をみると原発巣によるもの16例 (40%)、転移性脳腫瘍によるもの10例 (25%) であった。

病理診断と予後を比較すると組織像による違いはみられなかった。肺癌に限って25例の治療法と開頭術後の予後を比較すると根治手術+化学療法に6ヶ月生存率が高く、転移性脳腫瘍が発見されてから肺癌が発見されたものは6ヶ月生存率が低かった。転移巣発見時の原発巣の状態と予後をみると、primary が cure の場合6ヶ月生存率84.6%、primary が recurrence では0%、他部位転移の場合は50%であった。転移性脳腫瘍の治療と予後をみると、外科的処置単独では6ヶ月生存率は37.5%、外科的+照射+化学療法の場合は61.1%であった。予後を決める決定的因子は特でない。

長期生存の要素として、原発巣の治癒、他臓器への転移のないこと、脳転移先行でないことがあげられる。

転移巣手術後5年、10年の生存例を報告した。肺癌原発で小脳、右後頭葉に転移巣があり全摘し照射と化学療法を施行。病理像は腺癌と扁平上皮癌であったが、原発巣転移ともに病理学的な共通点として、癌細胞を取り囲む様に形質細胞、リンパ球、顆粒球が集簇しており、非常に免疫反応が強く現れていた。予後不良例にはこうした病理像はみられず、個体の免疫反応の強さが予後に大きく関係することを示唆する所見と思われた。5年生存率に radiation induced dementia がみられた。CT、MRI で脳萎縮、白質の低吸収域化が著明であった。

5) 転移性脳腫瘍の治療経験

柿沼 健一・大塚 顕久 (長野赤十字病院)
市川 昭道・長島 久 (脳神経外科)
西野 和彦

(対象, 方法) 過去5年間に当科で治療を行ない転帰までを追跡し得た転移性脳腫瘍30例について、(1)経過、死亡原因、(2)放射線療法、(3)化学療法、(4)手術療法各々の有効性、(5)原発巣不明例の経過から考察を加えた。(結果) (1)経過: follow up 中の3例 (1~17M) を除いて全例が死亡し、神経学的症状発現からは全経過5D~24M (平均 11.2M) であった。死亡原因は脳転移巣によるもの10例、原発巣によるもの13例、医源性のもの3例であった。(2)放射線療法は24例に行なわれ、CT上消失、縮小したものは15例だったが、不変あるいは増悪したものは9例であった。また follow up中の3例と3M以内の短期死亡4例を除くと17例中14例が再発し、再発を免れたものは3例であった。再発例は総て12M以内に再発しこのうち10例は再発巣が死亡原因となった。再発を免れた3例は12M以上生存し、原発巣が死亡原因となった。(3)化学療法は8例に施行されたが特に有効と思われたものは無かった。(4)摘出術は10例に行なわれ follow up 中の3例を除く7例全例が死亡し、このうち5例は再発 (4例は手術同部位に再発) した。(5)原発巣不明のものは2例があった。1例は症状発現より10Mを経て原発巣が判明したがこの原発巣により死亡した。(全経過 15M) 1例は78才の高令者で転移巣摘出後経過は良好であったが放射線治療により脳萎縮と全身状態の悪化を来し死亡した。(全経過 6M)。autopsy で silent な原発巣が発見された。(結論)放射線療法と手術療法により症状の一時的な寛快は得られても必ずしも再発は免れず、この原発巣が死亡原因となることが多い。今後はこの観点にたつて放射線療法と手術療法の再検討が必要であると考えられる。

6) 我々が経験した転移性脳腫瘍120例

—その予後に関連して—

西田 和男・小池 俊朗 (新潟市民病院)
清野 修・本多 拓 (脳神経外科)

我々が経験した脳転移癌 120例の中から、現在生存例と消息不明例を除いた100例について述べる。平均生存期間は7.5ヶ月、生存曲線は、5年、3年生存率は1%、2年、1年、6ヶ月、3ヶ月のそれは、5%、23%、43%、71%である。原発癌死40%と脳転移癌死44%で差はない。初発症状が原発巣からと、脳転移巣からでも生存期間に差はない。70才以上とそれ以下との平均生存期間